

(4) 定点把握対象五類感染症の概況

ア 患者定点について(表-3/p.36, 京都市感染症発生動向調査事業指定届出機関(定点)名簿/p.190~193)

定点把握対象五類感染症の発生状況を届出る「指定届出機関(定点)」は、インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点、性感染症定点および基幹定点の5種類からなっており、診断した患者数を週又は月単位で報告することになっている。

平成29年12月末の定点数は、インフルエンザ定点69、小児科定点43、眼科定点10、性感染症定点13、基幹定点1である。

行政区別定点数(平成29年12月末現在)

行政区\定点	インフルエンザ	小児科	眼科	性感染症	基幹
北	7	4	1	1	—
上京	5	3	1	1	—
左京	7	4	1	1	—
中京	5	3	2	2	1
東山	3	2	—	1	—
山科	7	5	1	1	—
下京	3	2	—	1	—
南	5	3	—	1	—
右京	8	5	1	1	—
西京	8	5	1	1	—
伏見	11	7	2	2	—
合計	69	43	10	13	1

イ 年間報告数, 定点当たり報告数の推移(表-4-1~5-2/p.37~40, 図-1~2/p.66)

(ア) インフルエンザ定点

インフルエンザの年間定点当たり報告数は、225.39(15,552例)であった。インフルエンザについての詳細は、「(1) エ 平成29年 インフルエンザのまとめ」p.3を参照。

(イ) 小児科定点

小児科定点からの11感染症の年間定点当たり報告数は、564.17(23,875例)であり、平成20年以降では平成27年、平成28年、平成22年に次いで多かった。上位5感染症は、感染性胃腸炎、手足口病、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、ヘルパンギーナの順となり、小児科定点全体の88.9%を占め、最も多い感染性胃腸炎は、51.6%を占めていた。

また、過去5年間(平成24年から平成28年まで)の平均値(過去5年平均値)より多い感染症は、11感染症中5染症(手足口病、RSウイルス感染症、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱、突発性発しん)であった。

インフルエンザ定点及び小児科定点把握対象感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数の 過去5年平均値との比 ()内は前年比
インフルエンザ	15,552	225.39	0.96 (0.85)
RSウイルス感染症	1,240	29.05	1.37 (1.53)
咽頭結膜熱	746	17.68	1.14 (0.90)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2,802	66.26	1.16 (1.11)
感染性胃腸炎	12,310	290.82	0.92 (0.80)
水痘	528	12.45	0.40 (0.80)
手足口病	3,861	91.53	1.78 (3.26)
伝染性紅斑	57	1.35	0.18 (0.15)
突発性発しん	822	19.43	1.02 (1.05)
百日咳	8	0.19	0.77 (0.79)
ヘルパンギーナ	1,002	23.58	0.99 (0.92)
流行性耳下腺炎	499	11.83	0.79 (0.28)
合計	39,427	789.56	—

(ウ) 眼科定点

眼科定点からの2感染症の年間総報告数は257例であった。

定点当たり報告数は、急性出血性結膜炎が0.20、流行性角結膜炎が25.50で、どちらも前年に比べ増加した。

眼科定点把握対象感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と 過去5年平均値との比 ()内は前年比
急性出血性結膜炎	2	0.20	0.67 (2.00)
流行性角結膜炎	255	25.50	0.95 (1.62)
合計	257	25.70	—

(エ) 性感染症定点

性感染症定点からの4感染症の年間総報告数は413例であり、その内訳は、性器クラミジア感染症235例、性器ヘルペスウイルス感染症108例、尖圭コンジローマ26例、淋菌感染症44例であった。前年比は、性器クラミジア感染症 0.88、性器ヘルペスウイルス感染症 1.03、尖圭コンジローマ 0.48、淋菌感染症 1.16であり、性器ヘルペスウイルス感染症及び淋菌感染症で前年よりも増加した。

性感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と 過去5年平均値との比 ()内は前年比
性器クラミジア感染症	235	18.08	0.86 (0.88)
性器ヘルペスウイルス感染症	108	8.31	1.16 (1.03)
尖圭コンジローマ	26	2.00	0.52 (0.48)
淋菌感染症	44	3.38	0.94 (1.16)
合計	413	31.77	—

(オ) 基幹定点

基幹定点対象感染症は8感染症あり、そのうち3感染症で報告があり、年間総報告数は5例であった。

ウ 月別の報告状況 (表-6-1～表-10/p.41～49, 図-3/p.67～68)

感染症発生動向調査における平成29年の報告週対応表は、<表-1/p.29>に示すとおりである。また、週単位で報告される感染症の月別集計は、対応表に基づいて行っている。

インフルエンザ定点におけるインフルエンザの月別定点当たり報告数は、1月(100.48)、2月(61.90)、12月(24.39)の順となった。

小児科定点における対象感染症の月別定点当たり報告数は、5月、7月、6月の順が多かった。感染症別報告数の月別1位は<表-10/p.49>に示すとおり、7月は手足口病であったが、他の月は感染性胃腸炎であった。

眼科定点及び性感染症定点における対象感染症の月別の報告数は、<表-6-2/p.42>に示すとおりである。

エ 年齢階級別の報告状況(表-11-1～14-2/p.50～57, 図-4/p.69～70)

インフルエンザ定点における年間総報告数の年齢階級別割合のうちでは、0～9歳が6,661例で全体の42.8%を占めた。

小児科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、1歳が最も多く22.4%を占め、以下2歳 12.9%、3歳 9.7%の順であり、4歳以下が総報告数の64.3%を占めた。

小児科定点における年齢階級別の感染症別報告数は、0～5箇月を除く年齢階級で感染性胃腸炎が1位(0～5箇月はRSウイルス感染症が1位)であり、2位は、0～5箇月では感染性胃腸炎、6箇月～3歳では手足口病、4歳以上ではA群溶血性レンサ球菌咽頭炎であった。

眼科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、30～39歳が28.0%と最も高く、次いで0～9歳が20.4%、40～49歳が17.5%であった。

性感染症定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、20～24歳が27.8%、25～29歳が20.1%、30～34歳が15.7%、35～39歳が9.2%の順であり、20～39歳が72.9%を占めた。

オ 行政区別の報告状況

行政区別の報告数、行政区別の定点当たり報告数、感染症別の行政区別割合及び行政区別の感染症別割合は、<表-15-1～18-2/p.58～65>に示すとおりである。